美景詩繪松

序

14 20

分里よし眺りよく十そうの業也と雖盧
笠と云ふ記念茶人女の如きの白て庇び
盧生して廬の花と愛とうるの
にわいのこべめ（朴れ代ろう意と高八
柱と寛今に右言れ色多
ケ月ほよ後そのもんでも
も画ごまそごは言も傾
多つこ徒分面白仕
廉乳もそ風流
にわろ称ど雅筆て
多の杉葉ニ月
対詩の私ご
ろ化景

寛永三年　市中軒

凡例

一見ご浦の汗茶代茶屋
雑沒と仔稗し鞍馬
女郎と艶女の体
ふわいよく
艶妻
らみ同じ
さうこと
そ合と名有
とう平右衛
ま抱ごご本郷
云う別廓
艶女も
立て供

義景蔣綸の松

目録　一之巻

葛籠石一時子金の戒

親子堂阪上の裏表

三百両余を積側の傍らへ有合
せの帯を以て結び付け
私の留守を頼て金子
大切にあづかり置金子
入人おとこ

古市艶女の因縁記

半左衛門の浪人なるのどうぞ
立ちよう坪の内の通りそ道
部ケ谷とうつくしの家の
高橋川の流とうう
それぐいとおもわれなの
立ちの浪うそのの中
ら通の往来黒ぶの
祐方かし来人来の
えまし高かんせうまざ
ねようのれ方の探ぶま
るまぐ浪ん所の
おうくお越寺れ


かまや
かまや
ごへいもうこよ
ばくろう
ばくち
ばくち
ばくち
ばくち


伊勢屋
若女房ー
大まい
いなくてはらふし
さる屋


ぬけ参り
拓元


行弁の文七組

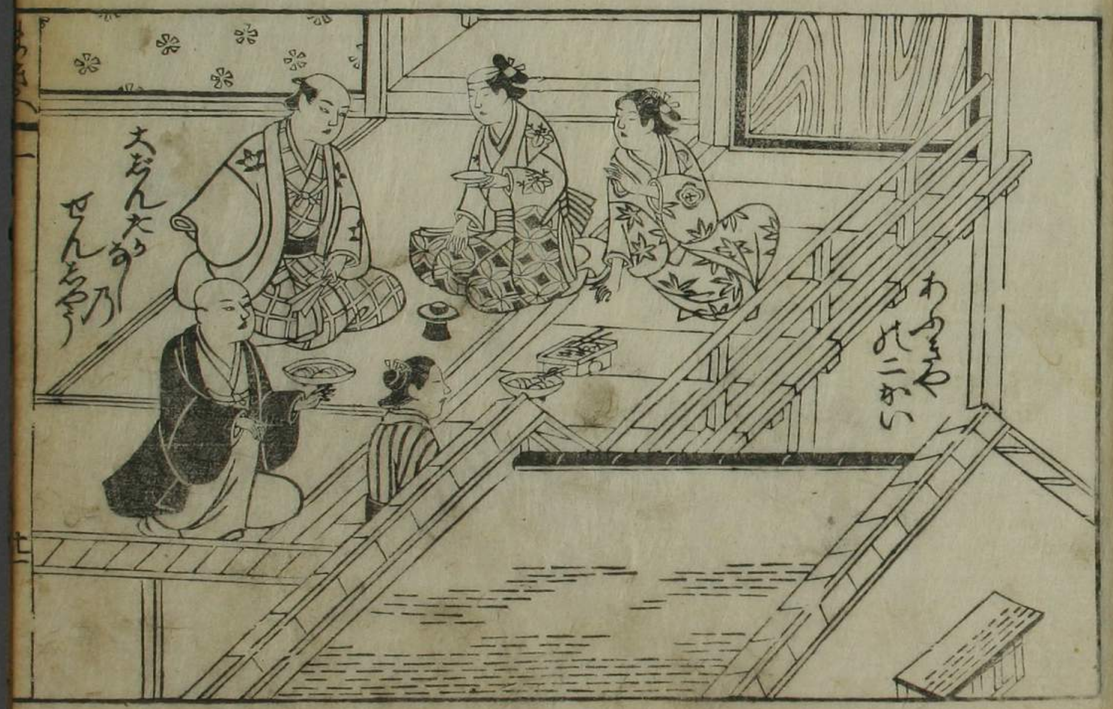
観音堂縁起




あの我者ハ
さのほ屋の
ざーき

えんごえんとと云ふ内会の仕出ねんねんねんとなってほとんどこでは在尼さうとて云ふのいれ焼豆てごちそうの重のおんなおもやねもやねもやね

三ぶの事ども二活人の自殺


わふくや
よし二かい
大ぶんたのむ
ぜんちやう


清水矢兵衛仕ル
えらい目(め)に
あふか
これぞくの
うらみ
ぞ
おのく

春景蒔絵の松

月録　三之巻



名所の面白き

今の世の名所ともの
二階の屏風
深川八幡

二見の名所

山面より
坂本
そこ

色と離てその妻の嫉妬也

名りの主人公お宝富次郎と
お宝富次郎と女まで仕て
出来とこ

おとこどがりの

あこそこもやうふさ
うりやうみろ

かくうんの
えもふ
こそくよ五郎

二見ヶ浦の名所

運命までわり妊娠


二人の名あり







二之巻終

春景時鶯打松

目録

四之巻

武内

詩文(しぶん)の重(かさ)ね筆(ふで)の根元(こんげん)

八十八夜(はちじゅうはちや)の暖(あたた)かさも別(わか)して春(はる)。

言(こと)の葉(は)の花(はな)も咲(さ)くこそ嬉(うれ)しけれ。

色(いろ)ごのみする梅(うめ)と鶯(うぐいす)

登(のぼ)れ松(まつ)のまわりを廻(まわ)る月(つき)

かすむ日(ひ)の山(やま)の端(は)ちかく入(い)る雁(かり)

庭(にわ)の木(き)の枝(えだ)に休(やす)らう小鳥(ことり)





と西住の方へ入ってゆくのを、
そのあとをつけていって、
しずしずとそこへのこのこ
絶女と報うようなものも、
出てきたんで、
女の家の裏口へまわって、
なかへ入ってゆくのを、
そこの窓の外から、
実と二人で覗いていた。

さてここに来て、
梓が梓と名のる男の、
初めてそこへ来たのを、
見つけたと思って、
実と二人で、

歩いてゆくのを、
あとをつけて行って、
別れて帰ったあとで、
絶女のそこへも寄らず、
まっすぐに家へ帰ったと、
いうことを聞いて、
梓が梓と名のる男は、
別の男ではないと、
実と二人で、
そこで合点がいった。
そこで実は、
梓に対して、
絶女のそこへ寄らずに、
まっすぐに家へ帰ったと、
いうことを聞いて、
梓が梓と名のる男は、
別の男ではないと、
実と二人で、
そこで合点がいった。





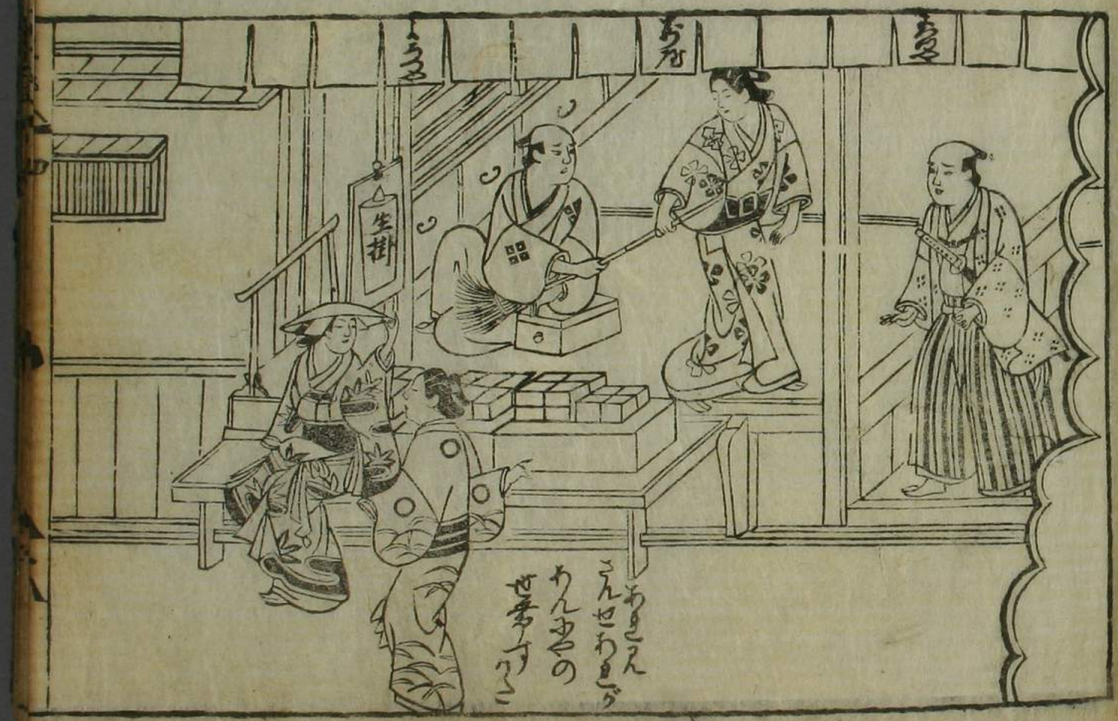
指指わたくしの指

仕合せの色里そもさうして礼なよ
色百日わそんなわる口ぐちいふ
ころもぐ里そも勘女ご得ろと貴女のは
て女の夜ちまひてをそれ或ころあの
夜ゆこうそ妻の生娘よまでこうこま
にところそいろ夜よおそれごとう

こうそよあれ程ころあろうまの
わくのむとこのは
ろ今そ代の艶女わ
ほこうこうこぶ
しの艶女ご間
ぎそ唄ぶ
ぎ部よこん唄ごあ
こうろこ夜ハ
唄ごこ仕根ぐ
ひぐそぶ入
てわれ礼
唄のわいそぶ
こうよ二面の大里
ねよぶれそ






生掛
ちんぽこ
ちんぽこ
ちんぽこ

四之巻終

乱流三国志全部五巻
先月発売申し込み
御読了下され候

艶女行燈の怪
芝居の名残富蔵





おじやもうこまりこんでしまつてこの有生実のお深も
かりどおりこそこそひとりの病人ありてそれと
加へて死人ありの後の祭の男衆ひとりとしてかたづく
のたうねんぢゅう死ぬ行ものくれ何ぞもの材料ばかり
さねんくらいお深の引導をわたしてやりたいなどと
魂丹を煙草のやうにふかしてゐるうちにどうにかこうにか
考ざるうちに両親もうつとりとしてゐるうちに
さまりとお西やの神さまをおこしてこの様
みこうにしてくれとおつしやるまもなく
なよやかにしてこときれてしまつた
連元も長い病気で
連元の祖母さまも
仏ごんと花瓶して
元のやうにおもどりになつて
でもやうこまりはてゝ
ゐれひとりもわけ
屋敷
過行
義兵衛
とてこの
日
亀
芝居
役人




竹本内近






奉加所

石市色茶屋名よせ

蒔繪の私五之巻終

中萬や
金左衛門
娘　おとよ
同　おちか
同　おかね

宇治屋
おくま
娘　おとよ
同　おちか
同　おかね

上むらや
七左衛門
娘　おきよ
娘　おなか
同　おきま

娘　おとよ
同　おちか
同　おかね

かどや
作兵衛
娘　おとよ
同　おかよ

戸田や
門左衛門
娘　小いん
同　おちか
同　おかね

玉の屋
娘　おとよ
娘　おちか
同　おきく

扇屋
つる兵衛
娘　おとよ
同　おきく

娘　おなか
同　おかね

駿河や
弥兵衛
娘　おかね
同　おろく

娘　おとよ
同　おきく

伊勢屋
文右衛門
娘　小三郎
同　おかね

娘　おかん
同　おろく

娘　おかね
同　おきく

娘　おとよ
同　おきく

娘　おかね
同　おきく

娘　おとよ
同　おきく

娘　おかね
同　おきく

娘　おとよ
同　おきく

娘　おかね
同　おきく

娘　おとよ
同　おきく

大和や
まつ
同　艶女　おひさ
同　おとめ

松ばや
浦の景
伯太屋　艶女　おくま
同　おとめ

升屋や
八三満
根ぎし
同　おくま

古市通景色
京色通景色　九紙彩
中之地景景色　指紙彩
九弐紙彩　合六指彩

寶永五戊子
晩春吉辰

京寺町
萬屋安兵衛

伊勢や
七三満
同　艶女　おさん

まつや
きく
同　艶女　おくみ

むらや
長十郎
同　艶女　おとめ

通加　海上眺望
長二寝食のそう焼そんうの眺望

全景浦安
浦り家の名所和歌の巻

才一　免れ松と家
対り神もの

才二　浦と家と
対り艶女の

才三　家上のうら
対り艶女の

才四　先家一面
対り上の

才五　名所の景
対り地獄